一色逸雄大兄へ

三中37回　宮田義男

拝啓

大変な酷暑がつづきます。お元気でお過ごしの事と拝察致します。

この度は半田での殉難同窓生の慰霊を兼ねた元工場跡や合宿の寮等、思い出深き六十年昔の動員の地を訪ねる旅行に誘って戴き、有り難うございました。

正直に言って全く驚きました。先に雁宿公園内の殉難学徒之碑に献花して黙祷を捧げ側面にあった京都三中一三人として同級生の名前が刻んでありました、木本修・志賀裕・真殿直行の三名は子供の頃の顔をしっかり覚えていて胸が熱くなり思わず涙がこぼれました。驚いたのはその後です。バスの中や工場跡地さらに旅館に着くまでの間色々と聞かされた話は、小生は到底信ずる事が出来ない過酷な悲惨な話でした。小生こそ我々海

軍予科練習生は、國の為、生命を捧げ死を覚悟の上、来る日も来る日も月月火水木金金と猛烈な訓練を重ねた十五ヶ月でした(昭和二〇年六月に予科練習生の訓練期間は卒業しました)。しかしその間の、衣・食・住は十分に満ち足りて、隔週の日曜日の外出はそれまでの猛訓練の疲れを癒し嫌な出来事を忘れ、明日からの訓練に耐える為の鋭気を養うに十分な楽しい外出でした。

話を戻して三中時代の二年の秋か三年の春に、宇治田原へ三～四日の泊まりがけの勤労奉仕に行った覚えがあります。昼間一生懸命に働き夕方に風呂に入り、晩御飯は村の方がお礼の意味で毎晩ご馳走してくれた事を覚えています。夜は村の小学校の講堂で最近亡くなった国友昌三君、中川悦三君と殉難の真殿直行君と後二人程誰だったか覚えがありませんが、ともかく夜遅くまで剣道や柔道そして球技などをして遊び大変楽しかった事を記憶しています。

半田の動員で諸兄が昼間の仕事で疲れた後、草履を引き摺って四キロの道を宿舎まで歩いて帰った事、一九年の暮れ、正月のための休暇も無かった事、聞くに耐えられぬ出来事ばかりでなんとも言いようのない空虚な心境に陥っています。同級生多数の諸兄が六十年の昔、これ程の苦労に耐えて、終戦の日を迎えられた事の真相を初めて知り、現在、小生は本心、複雑な無

念の怒りのやり場の無い胸中です。昭和二十年の九月に小生は北海道の千歳の空挺特攻の秘密基地から復員しました。十月に入って三中へ復学の手続きに行き、その時初めて半田の事を知りました。十三人も亡くなり同級生は四年で切り上げ卒業して、現在は一学級下の生徒が最上級生で来年の三月に、それらの者と同時に卒業証書を渡してあげましょうと、藤森校長先生が言われ、昭和二十一年三月に卒業証書を戴いた覚えがあります。

終わりになりましたが、本年、平成十六年四月一日は、小生が皆さんと学窓を離れ、海軍甲種飛行予科練習生として鳥取県の美保海軍航空隊に入隊して丁度六十周年の記念日になります。約四千名が同期生です。これまでは各分隊で（学校のクラスと同じで二〇〇名単位）では、毎年全国の何処かで同期会を行ってきましたが、今回は六十周年記念と言う事で、小生が全国の同期生に檄文を配り、前日は皆生温泉の旅館で前夜祭を行い、四月一日は元の美保航空隊が現在航空自衛隊美保基地になっていますので、基地内の予科練記念碑前で記念の式典を開催しました。幸い北は仙台・山形から九州は長崎・熊本まで、全国から約二百名の同期の桜が参集してくれました。当日の模様を記録した基地広報機関紙と地元の新聞のコピーを同封します。参考までに見てください。

話題を動員の話に戻しますが、貴兄の判断で他の同窓生には

聞かさぬ方が良いと思われたら、ここだけで貴兄の胸の中に治めて下さい。それは小生は皆さんが先に聞いたような非常な苛酷の条件下で動員の数ヶ月を過ごされたとは夢々思っていませんでした。昔の宇治田原の勤労奉仕の様に昼は働くが、夜はまるで修学旅行の延長の様な和気藹々とした楽しい夜をすごしておられ、宿舎と工場は運動場を隔てた距離ぐらいに思っていました。何か自分が悪い事をしていたような変な気分になりました。

以上が今回の慰霊を兼ねた臨時の同窓会に特別に参加して感じた率直な思いを一筆書きとどめました。文面の中身に不愉快に感じられる所がありましたら何卒ご容赦ください。

小生の生き甲斐と誇りは

① 母校が京都府立京都第三中学校である事と三七会の会員である事。

② 海軍甲種飛行予科練習生の課程を操縦部門で卒業した事。

以上の二つの事柄はどの様な場所に於いても、堂々と生涯の生命の果てるまで大きな誇りにしています。

今夏は、ことさら暑さが厳しいです。健康に留意され益々のご健勝を祈念して止みません。次回十二月には元気でお目に掛かる事を楽しみにして、今回はこれにて失礼します。敬具